

京都大学言語学懇話会報告

1 9 8 8 年度

第16回例会 1988年4月9日(土) 午後1:30~4:30

京大会館211号室

研究発表 「現代ヘブライ語における passive と aspect について」

佐々木嗣也(D1)

同 「テンボ語通時音韻論、そしてそれが共時態に及ぼす影響」

梶茂樹(東京外国語大学)

第17回例会 1988年7月16日(土) 午後1:30~4:30

京大会館211号室

研究発表 「フィンランド語の移動現象と統語構造について」

岸田泰浩*(D1)

同 「不適条件表現に関する覚書

——現代日本語の二種の文法現象をめぐって」 田野村忠温(奈良大学)

第4回大会 1988年12月10日(土) 午前11:00~午後5:00

京大会館102号室

開会の辞

西田龍雄 教授

研究発表 午前

「清学書に現れた満洲語ハングル表記について」 岸田文隆(D1)

「現代口語ビルマ語における動詞助辞 -ta_/-hma_ をめぐる問題」

澤田英夫*(D1)

同 午後

「Three Types of ECM Constructions in Japanese」 酒井 弘*(D1)

「遊離構文について」

林 博司**(神戸大学)

「対話における知識管理について

——対話モデルからみた日本語の特性」

田窪行則**(神戸大学)

「朝鮮語の同形異語

——機械処理および教育上の観点から」

油谷幸利**(天理大学)

* 本誌掲載論文を参照下さい。

** 第4回大会の午後のプログラムは西田龍雄教授の還暦をお祝いする趣旨で、本年三省堂より刊行予定の西田龍雄教授還暦記念論文集『アジアの諸言語と一般言語学』に論文を寄せられた卒業生の方3人に、寄稿論文と関連した問題についてお話ししていただきました。発表要旨は省略させていただきますが、同論文集所載の以下の論文を参照下さい。

林博司「ルーマニア語二重代名詞について——談話論的考察」

田窪行則「対話における知識管理について——対話モデルからみた日本語の特性」

油谷幸利「朝鮮語機械辞書の見出し語形について——変則用言と母音語幹用言を中心に」

Tsuguya Sasaki

The present study is concerned with the alleged aspectual opposition of two passive patterns (binyanim) in Modern Hebrew, PAUL and NIF'AL, in the present and past tenses. It is shown that the aspects they represent are not always the same, as was maintained by some scholars, but depend on the inherent aspectual characters of the predicates as summarized below.

INHERENT ASPECTUAL CHARACTERS OF THE PREDICATES

dynamic	punctual	telic	event	
	durative		telic process	
atelic		atelic process		
		stative	state	

(PRESENTATIONAL/PHASAL) ASPECTS OF PAUL AND NIF'AL

event		PAUL	NIF'AL
	PRESENT	perfect	prospective
	PAST	perfect	perfective
telic process		PAUL	NIF'AL
	PRESENT	perfect	imperfective
	PAST	perfect	perfective
atelic process		PAUL	NIF'AL
	PRESENT	imperfective	imperfective
	PAST	imperfective	imperfective
state		PAUL	NIF'AL
	PRESENT	imperfective	imperfective
	PAST	imperfective	imperfective

(佐々木嗣也、博士後期課程)

〔第16回例会〕

テンボ語通時音韻論、そしてそれが共時態に及ぼす影響

梶 茂樹

テンボ語（アフリカ、ザイール共和国東部に話されるバンツー系の一言語、J.57）は通時的に、きわめてはげしい子音の変化をこうむっている。その中でもきわだっているのは、1）鼻音がその前に来ないという条件のもとでのいくつかの子音の脱落と、2）*j*、*y*（tense の *i*、および *u*）による先行子音の変化（深い口蓋化など）である。このうち、子音の脱落を見てみると（脱落するのは **g*、**j*、**p*）、概略つぎの1から4の4つの場合がある（5はテンボ語でも子音が残るもの）。なお右端のは動詞の不定形ですべて *kú* + 語根 + *á* という構造を持っている。

- | | | | | |
|----|---------------------|-----|-------|--------|
| 1. | *-gân- | 物語る | -ʔán- | kwá:ná |
| 2. | *-jéd- | 白い | -èr- | kwèrá |
| 3. | *-p _j k- | 着く | -ʔík- | kwí:ká |
| 4. | *-pák- | 塗る | -ák- | kwáká |
| 5. | *-dúm- | 噛む | -lùm- | kúlumá |

ここで ʔ としたのはそこに声門閉鎖音が現れるという意味ではなく、2つの母音が連続するとき、前の母音の半母音化など表面的な調整はおこるにせよ、あくまでも2モーラのまま留まるという場合である。それに対して ʔ のない場合は、その2つの母音が完全に融合して一モーラ化する（/aʔi/→[ai] 対 /ai/→[e] などの例の方がわかりやすいかもしれない）。つまり前者の場合は、母音連続に関して ʔ が2つの母音の融合をいわばブロックするわけであるからまだ子音の痕跡を残しているといえる。

これを共時的にみた場合、この言語の母音の長短と子音音素に関して2つの解釈が可能となる。ひとつは、母音の長短を認めて ʔ というあやしげなセグメントを認めないもの、もうひとつは、母音の長短を認めずに ʔ を認めるものの2つである。

いずれの解釈をとるかは理論的立場にもよるが、ひとつ問題を複雑にしているには、**P* が同じ環境と見えるところで、ある場合は痕跡を残し、ある場合は残さないということである（上の3、4参照）。しかし、こういった問題を考える際には、バンツー祖語の子音母音をもう一度考え直してみる必要があるようだ。

（かじ しげき、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

[第17回例会]

不適条件表現に関する覚書
——現代日本語の二種の文法現象をめぐって——

田野村 忠温

1 次のような文では、下線を施した部分が意味上係って行く相手が表現されていない。

(1)せっかく人が手伝ってあげるって言ってるのにかわいくないの。／(2)人には休むなと言っておきながら勝手な人ね。／(3)何も知らないくせに黙ってろ。／(4)朝早くから御迷惑だとはおもったのですが...／(5)転んだくらいで弱虫ねえ。／(6)わざわざすみません。／(7)裁判官ともあろう人が何ということだ。

こうした文は、次のような形で理解されるはずである。

(1')～手伝ってあげるって言ってるのに(断ワルトハ)かわいくないの。／
(2')人には休むなと言っておきながら(自分ハ休ムトハ)勝手な人ね。／(3')何も知らないくせに(口ヲ挿ミタガル。)黙ってろ。／(4')朝早くから(オ伺イスルノハ)御迷惑だとはおもったのですが...。／(5')転んだくらいで(泣クトハ)弱虫ねえ。／(6')わざわざ(オコシイタダイテ)すみません。／(7')裁判官ともあろう人が(盗ミヲ働クトハ)何ということだ。

「～にもかかわらず」といった意味の表現を一括して「不適条件表現」とすると、不適条件表現を含むことが、(1)～(7)のような省略表現の成立の必要条件であることを論じた。

2 次のような事実が知られている。

(8){寒いけど|寒くても|×寒いのに}行け。／(9){寒いけど|寒くても|×寒いのに}行こう。／(10){寒いけど|寒くても|×寒いのに}私は行きたい。

一見、「のに」は、後続し得る表現のムードの種類に制限を課すかのようである。しかし、この見方が正しくないことは、次のような例から明らかである。

(11)寒いのに行くな。／(12)真面目に話してるのにごまかさないでよ。

一方、「のに」を含まない文でも平行的な現象が見られる。

(13)×どうせ読まないくせに買え。／(14)どうせ読まないくせに買うな。

(8)～(14)に見る事実は、むしろ、「のに」を始めとする不適格条件表現に共通する(ムードということには無関係の)性格に由来する現象であることを論じた。

【付記】詳細は、同名の拙論(『奈良大学紀要』第17号、1988年)によらるたい。

(たのむら ただはる、奈良大学)

〔第4回大会〕

清学書に現れた満洲語ハングル表記について
——特に満洲字 e に対する 2 通りのハングル表記をめぐる——

岸田文隆

現伝する朝鮮司訳院刊行の清学書（満洲語学書）には、満洲語をハングルによって表記している部分が見られるが、この満洲語ハングル表記は、当時の満洲語の発音をうかがい知るうえで、貴重な資料を提供するものと考えられる。本発表は、これら清学書において、満洲字 e に 2 通りのハングル表記がなされている現象をとりあげ、これが当時の満洲語の発音上のちがいを示すものであることを主張したものである。

満洲字 e は、清学書において、普通、ハングル ㅊㅅで転写されるが、一部の語に現れる e については、ㅡw で転写されることがある。本発表では、まず、清学書読本類を資料として、満洲字 e がㅡw で転写された全語例を抽出・提示することによって、このような満洲字 e に対するハングル表記の書分けが、各清学書ごとの若干の相違はあるものの、ほぼ単語により一定していること、また、満洲字 e がㅡw で転写されるのは、s や d など歯音に後続する場合に多いことを確認した。

〔例〕bedere- : 베틀리 bə-dw-rə (退く),
dere : 드리 dw-rə (〜だろう), se- : 스 sw (言う) など]

つぎに、清学書において、ハングルㅡw が、満洲字特殊字母の sy, tśi, dzi の転写にも用いられる字母であることに着目し、

〔例〕sytu : 스투 sw-tu (司徒), tśitśi : 츠츠 cw-cw (刺史), fudzi : 푸즈 pu-jw (夫子) など]

満洲字 e が時にハングルㅡw で転写されている叙上の現象は、満洲字 e が時に特殊字母の sy, tśi, dzi と近似した音価を持つ場合があったことを示すものであることを指摘した。そして、特殊字母の sy, tśi, dzi は、それぞれ、漢語の (sy) 四・思・司、(tśi) 慈・次・此、(dzi) 滋・子・資などを表記するのに用いられる字母で、高母音の [i] を含むものと考えられることから、満洲字 e に対する叙上の書分けは、満洲字 e が、時に高母音の [i] あるいは [u] の音価を持つことがあったことを示すものと推測した。

さらに、このような推測が、満洲語口語についてのシロコゴロフの報告や、シボ語口語の一部の単語において満洲文語の e が高母音で現れる事実等にも、傍証を得ることができることを述べた。

(きしだ ふみたか、D1)